内視鏡治療実績　年間3,500例以上

全道トップレベルの実績
消化器病センター医療

今年６月に市立病院内に開設された消化器病センター。センター長の南医師は、先駆的に胃がんに対する新しい内視鏡治療（ESD）を行ってきました。医学会からも注目されている留萌市立病院消化器病センターについて、市民のみなさんにお知らせします。

消化器病センターの特長

- ■消化器病に精通したスタッフ
- ■専門医による最新治療
- ■病棟移動のない入院治療
- ■各科スタッフの連携による最適な治療計画

苦痛の少ない内視鏡検査

留萌市立病院消化器病センターでは、患者さんの希望や検査内容によって、軽い静脈麻酔を行っています。初めて検査を受けられる方や、緊張や不安の強い方には効果的です。静脈麻酔を行った方は、検査終了後1時間程度ベッドでお休みいただきます。

胃の内視鏡検査は、通常の口から挿入する内視鏡に加え、鼻から挿入可能な経鼻内視鏡を導入しています。口から挿入する内視鏡より非常に細く、嘔吐反射の辛さが少なくなりました。

検査中に画面で自分の胃を見ながら質問することも可能です。

大腸内視鏡検査は、検査前に飲む薬（便をキレイに出してしまう）の味と量を変えたので以前より飲みやすくなっています。

安心快適な入院生活

消化器病センターが開設してからは内科から外科手術、そして術後管理から退院まで同じ病棟で過ごすことができます。

入院から退院まで同じ病棟のスタッフが一連の流れの中で関わりを持ち、患者さんは病院スタッフとコミュニケーションが可能となり安心快適な入院生活が過ごせます。

信頼される消化器病センターに！

留萌市立病院消化器病センター長
南　伸弥　医師（36歳）

まず我々がお互いのスタッフを信頼できなければ、市民の皆様に信頼される医療を提供するのは無理だと思っています。外科のトップである副院長の越湖進先生は雑誌等でも紹介されていますが、〝私が外科医だったらああいう外科医になりたい〟と思う非常に優秀な外科医です。

内科と外科は特に密接な関係ですが、このような先生とチーム医療を行える環境に感謝しています。

また、病気の良・悪性を診断する病理診断科の池田英之先生が昨年赴任されました。外来や病棟では患者さんを受け持つことがないので、皆さんにはなじみが少ないかもしれませんが、これは当センターにとって非常に大きいことです。治療方針の決定が迅速となるだけでなく、手術中の切除範囲の決定など緊急時において特にその存在の大きさに改めて気づかされます。

昨年最新式のCTが導入されましたが、これを駆使するべく放射線技師さんも大変熱心に勉強されています。病変があれば医師からのオーダーがなくても、今までのCTではできなかった詳細な画像を構成するなど臨機応変に対応してもらい、大変助かっています。

ESDなどの新しい治療を導入する際、看護師さんの協力が不可欠ですが、みなさんに驚くほど協力してもらいました。特に直接治療に携わる検査チームの看護師さんには、治療導入当初より多大な迷惑をかけましたが、イヤな顔ひとつせず協力してもらいました。

このスタッフでなければ当院にESDを導入できなかったと考えています。

尚、今年から〝日本がん治療認定医機構〟による資格試験が開始となりましたが、当科の宮島治也先生・高梨訓博先生・私と3名合格しました。これにより、当院をがん治療認定施設としても今後新たに申請を行う予定です。

今後は、こうした施設認定という形などで市民の皆さんにアピールすること、また前述したような優秀なスタッフとともに日常の診療を通してさらに信頼していただけるような治療を続けていくこと、今のスタッフであれば十分可能だと思いますし、それが急務であると考えています。

ESDの利点

ESDは、内視鏡的膜下層剥離術のことをいい、今までの治療法よりがんの再発が非常に少ないという利点があります。さらには大きな病変も切除が可能となったことで内視鏡治療の適応となる胃がんの症例数がこれまでの約4倍となりました。

日本で開発され現在世界に急速に普及しつつある治療法です。

最初の治療用ナイフが全国的に発売されたのが、2002年。保険診療が認められたのは、2006年ですから非常に新しい治療法です。

留萌市立病院では、2003年に南先生が国立がんセンター中央病院内視鏡部から異動してきたことでESDの治療を始めました。

当初は、保険が適用されず大変でしたが、患者さんにとっては非常に有益な治療法であることから積極的に取り組んできました。